

## 肯定側立論

### プラン

1. 自治体指定のゴミ袋を売ります。  
価格は **20** リットル入り **20** 円、**30** リットル入り **25** 円、**40** リットル入り **30** 円とします。
2. **2006** 年 **4** 月より、全国の自治体で行います。

メリット1は「リサイクルの推進」です。

発生過程を説明します。

ごみ収集の有料化によりごみが減量され、リサイクルが推進されます。

証拠資料を引用します。出典は、『日本の論点 **'98**』<sup>よりもとかつみ</sup> 寄本勝美、早稲田大学教授の論文<sup>1</sup>からです。引用開始。

「埼玉県与野市は **1996** 年 **4** 月から家庭ごみの収集を有料制に切り換えたところ、不燃ごみは前年度の同時期と比較して月平均 **28** パーセントの減少となった。その反面、市が週に一度再生資源として集めているペットボトル、びん、缶は **77** パーセントも増えている。同じように可燃ごみは **16** パーセント減少する一方、古紙・古衣類の収集量は **15** パーセントの増加となった。」引用終了。

重要性を説明します。

リサイクルが推進されると、ごみになりやすい製品が減少し、資源の消費が抑制されます。

証拠資料を引用します。出典は、山谷修作、東洋大学教授『リサイクル文化』**1996** 年 **3** 月<sup>2</sup>です。引用開始。

「有料化するための合意形成に向けた自治体からの働きかけや、市民との話し合いによって意識改革がなされ、それが行動に結びついていく。分別の意義が理解され、ていねいな分別がされるようになり、リサイクルが活発化する。行政の側も減量化の受け皿づくりのために、集団回収への補助金を手厚くしたり、市収集による資源回収をすることになる。消費行動も変化する。過剰包装を断ったり、モノを大切に使ったり、長く使えるモノを買うようになってくる。こうなるとそれが生産、流通にも反映され、過剰包装やごみになりやすい製品が減ることになり、資源の消費が抑制される。」引用終了。

---

<sup>1</sup> 寄本勝美（早稲田大学教授）「ごみ収集の有料化は確実にリサイクル社会を定着させつつある」『日本の論点 **'98**』（**1997** 年）、pp. **408-409**

<sup>2</sup> 園田真見子（ごみゼロ・ラウンドテーブル）「一般ごみの有料化を考える—山谷修作・東洋大学教授に聞く」『リサイクル文化』（**1996** 年 **3** 月）、p. **19**

メリット2は「ダイオキシンの減少」です。

発生過程を説明します。

ダイオキシンの大部分は、一般ごみ焼却場から発生しています。

長山<sup>じゅんや</sup>淳哉、九州大学医療短期大学部助教授は『しのびよるダイオキシン汚染』1994年<sup>3</sup>の中で以下のように述べています。引用開始。

「わが国で一年間に生成するダイオキシン類の全体量 **6000 g (100%)** のうち、**5000 g (約 83%)** は、一般の都市焼却場で固形の廃棄物が焼却処理される際に発生し、煙や灰を通じて生活環境全般を汚染しています。ダイオキシンやダイベンゾフランの大部分は、普通のゴミを焼却場で燃して処分するときにはできるのです。」引用終了。  
このように一般の家庭ごみが減らない限り、ダイオキシンは発生し続けます。

重要性を説明します。

ダイオキシンは人間の生存に影響を及ぼす大変危険な物質です。

田口<sup>まさみ</sup>正己、立正大学教授は、『ごみ問題百科Ⅱ』1998年<sup>4</sup>の中で以下のように述べています。引用開始。

「ダイオキシン類問題はダイオキシン類が呼吸や食物摂取を通じて体内に入り込み蓄積した場合、人体に計り知れない大きな影響を及ぼすことを意味している。個々の人間の健康や生存に影響をおよぼすにとどまらず、影響は人類の存亡にもかかわると認識されている。厚生庁<sup>ママ</sup>が専門家をあつめ設置した「ダイオキシンリスク評価研究会」は「ダイオキシンのリスク評価」(1997年7月)を発表しているが、その中で、ダイオキシン類(この場合はコプラナーPCBを除く)について、急性毒性、慢性毒性、遺伝毒性、発がん性、催奇形性、生殖毒性、免疫毒性など多面的な毒性をあげている。」引用終了。

プランを実行してごみ収集を有料化すると、このダイオキシンの発生を抑制し、減少させることができます。

---

<sup>3</sup> 長山淳哉(九州大学医療短期大学部助教授)『しのびよるダイオキシン汚染』(講談社、1994年)、**p. 103**

<sup>4</sup> 田口正己(立正大学教授)『ごみ問題百科Ⅱ』(新日本出版社、1998年)、**pp. 40-41**